

研究課題	若手教員の ICT 活用指導力向上と活性化のための「栗原版 StuDX Style」の構築と実践
副題	～若手教員をつなぎ、学び続ける教員集団をめざす、プラットフォームの活用を通して～
キーワード	StuDX Style, 若手教員, ICT 活用指導力, プラットフォーム, 教育の DX 化
学校/団体名	公立栗原市情報教育推進委員会 栗原 StuDX チーム
所在地	〒987-2252 宮城県栗原市築館薬師一丁目 6-1
ホームページ	<a href="https://sites.google.com/d/1XIfu-bsRFFjlmwPolrAAGI7cHXwPqHfg/p/1eALLJV8D2nLqxneKLYvDMm9NLg_8EVvS/edit">https://sites.google.com/d/1XIfu-bsRFFjlmwPolrAAGI7cHXwPqHfg/p/1eALLJV8D2nLqxneKLYvDMm9NLg_8EVvS/edit</a>

### 1. 研究の背景

○社会の進歩や変化が加速するとともに、子供の姿も大きく変化してきている。このような社会の変化、子供の変化に対応すべく、2012年(平成24年8月)の中央教育審議会答申では、「学び続ける教員像」の確立が提言される等、教員の資質能力の向上が重要視されている。また、2022年(令和4年8月)に改訂された「公立の小中学校等の校長及び教員としての資質の向上に関する指標の策定に関する指針」では、図1のように従来の「教職に必要な素養」「学習指導」

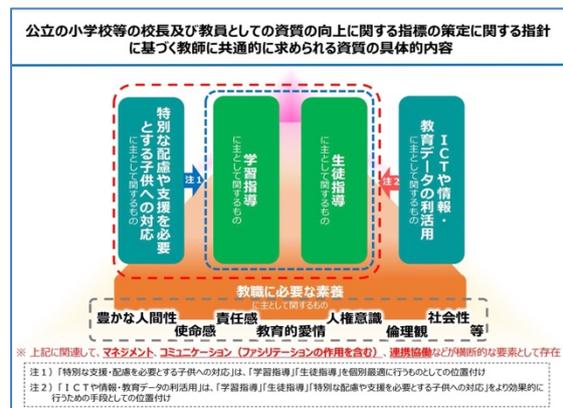


図1: 教員に求められる資質能力の具体的な内容(文部科学省)

「生徒指導」に、「特別な配慮や支援を必要とする子供への対応」と「ICTや情報・教育データの利活用」に関するものが加えられる等、教員に求められる資質・能力が多岐にわたってきており、常に研修と修養を積む姿勢が求められている。

○このような状況の中、本市では、新規採用教員の急激な増加により、経験年数の均衡が崩れている。経験年数10年未満の若手教員が約38%、25年以上のベテラン教員が約37%である一方、若手教員の目標であり精神的な支柱となる10～25年未満の中堅教員が約25%と不足しており、校内でのOJTが十分機能できない状況となっている。特に小規模校においては、中堅教員不在の学校も少なくない。また、コロナ禍及び働き方改革の名のもと、公開研究会や各種研修会も少なくなり、勤務校以外の教員の授業を参観したことが一度もない若手教員が多数存在する。このような中、教員同士の縦と横の繋がりが希薄となり、日々の悩み等を共有できず、孤立化が懸念されている。市をあげて若手教員の指導力の向上と心のケアを行い、学び続ける教員としての基礎を形成していく必要がある。

○若手教員の中には、GIGAスクール構想による急激なICT環境の進展に追い付けず、コンテンツを見せる授業、教科書をなぞる授業となってしまう教員も少なからず存在する。そのような中、児童・生徒の学力低下が懸念されており、近年右肩下がりとなっている。また、市内教員の「ICT活用指導力」については、ハード的な導入は全国とほぼ同様であるとともに、「令和4年度学校

における教育の情報化の実態に関する調査結果」についても全国とほぼ同様の状況である。しかし、現実の授業の様子を見てみると、B（授業に ICT を活用して指導する能力）や C（児童生徒の ICT 活用を指導する能力）については若手教員の指導力に大きな差があるのが実態であり、市をあげて底上げを図る必要がある。各教科の学習における ICT を活用した個別最適な学びと協働的な学びを一体的に推進し、主体的・対話的で深い学びを指導する力が必要となっている。

## 2. 研究の目的

### (1) 教育活動的側面から

#### ①若手教員の実践的な指導力の向上

昨年度の研究で動き始めた、授業に役立つ実践事例集の収集・蓄積・活用や、「栗原版情報活用能力育成表」を意識した授業実践の取り組み等を、市全体で継続・発展させていくことにより、若手教員の実践的な指導力の向上を図る。そのことが同時に児童・生徒の学力の向上にも繋がっていくと考える。

#### ②若手教員同士の縦と横のつながりの促進による、「学び続ける教員」に向けての基礎づくり

プラットフォーム上での若手教員の日々の顔の見える交流により、互いに学び合い、切磋琢磨できる環境となることで、「学び続ける教員」の基礎をつくる。

### (2) 研究的側面から

#### ①「栗原版 StuDX チーム」による教員の ICT 活用指導力向上と児童・生徒の情報活用能力向上の取組

今年度の研究で組織したチームにより、教員の ICT 活用指導力の向上と児童・生徒の情報活用能力の向上に向けた組織的な取り組みを展開することで、市全体のレベルアップを図る仕組みを構築する。

#### ②学校を超えた 0JT の構築による、若手教員育成の仕組みと学び続ける教員集団の形成

若手教員が学校を超えて参加するネット上のコミュニティ内での 0JT と、校内における授業に直結した 0JT を通して、指導力の向上をめざす仕組みを構築し実践する。学校内外のコミュニティ内での 0JT により、学び続ける教員集団の形成と市全体で若手教員を育てると意識の醸成を図る。

## 3. 研究の経過

### (1) 「ICT 活用栗原スタイル」構築・実践チーム

栗原市内の教職員の ICT 活用指導能力の向上とともに、児童・生徒の情報活用能力の向上を図ることを目的としたチームである。



図 2：栗原版情報活用能力育成表

① 「栗原版情報活用能力育成表」の作成と活用

市内教員の ICT 活用指導能力の向上と児童生徒の情報活用能力の向上をねらい、「情報活用能力育成表」(図 2) を構築した。文部科学省が示している「体系表例」や各自治体で作成しているもの等を参考に、本市の教員及び児童生徒の実態に合ったものを作成した。本育成表を全教員に配布し、以下の観点で活用を図った。本育成表を意識するだけで、日々の教科の学習の中に情報活用能力育成を意識した学習を行うことができ、児童生徒の能力向上に繋がっている。

- 管理職は、自校の情報活用能力の育成状況を把握し改善を図るための指針として活用。
- 研究主任・情報教育主任は、学校の実態に合わせて段階的に進めるための基準として活用。
- 各担任は、各教科の学習の中での具体的な指導改善と充実を図る目安として活用。

(2) 「ICT 活用授業研究チーム」

市内教員(若手教員)の ICT 活用指導能力の向上と児童生徒の情報活用能力の向上を目指して、実践事例集の収集・活用促進と、授業に役立つ研修会を行うことを目的としたチームである。

① 「ロイロノート実践事例集」収集・活用

市内教員の ICT 活用指導能力の向上と児童生徒の情報活用能力の向上を目指して、個々の教員が日常の授業で自作した教材を収集し、市内教員に自由に活用してもらえるような仕組みを作った。学年・教科・単元・活用の意図・活用の手順等を簡潔にまとめた表紙を付けて保存することで、特に若手教員が手軽に活用することができるようにした。

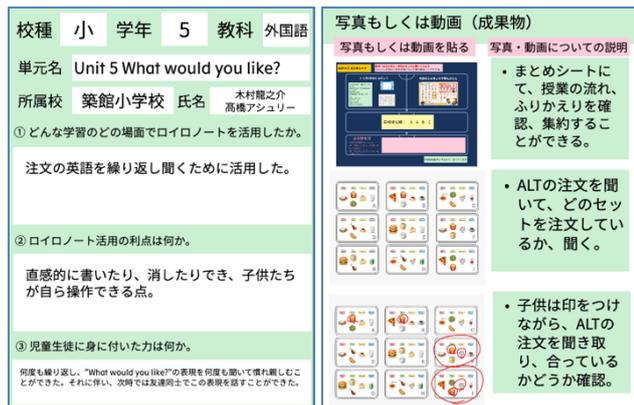


図 3: ロイロノート実践事例集

ロイロノートの教員の資料箱に収集することで、市内教員であれば誰もが自由に活用できるようにしている。今後、さらに広がっていくことを期待している。

② 授業に役立つ研修会の実施

教員の ICT 活用指導力の向上を目指し、築館小学校を会場に以下の4つの研修会を実施した。

- ロイロノート研修会
- NHK for School 研修会
- AI ドリル活用研修会
- 自由進度学習研修会

いずれの研修会も、操作研修会ではなく、授業に直結する研修会とした。講師による授業での活用等の説明や、操作研修会の後、同学年や同教科のグループを作り、明日以降の授業にすぐ使える教材づくりや授業づくりを充実させた。



写真 1: NHK for School 研修会

### (3)「栗原教員研修プラットフォーム」構築・実践チーム

栗原市内の教職員（特に若手教員）の授業力向上のためのプラットフォーム構築を目的としたチームである。

#### ①プラットフォーム構築と活用

市内の教職員が、授業を行うに当たって参考となる Web ページや、参考資料等を収集し、提示するページを構築し、常時更新している。本委員だけでなく、中堅・ベテラン教員が授業するに当たって日常的に行っているノウハウ等を収集・掲示し、若手教員がその情報を参考に、自ら学び続ける教員の基礎をつくれるようにと進めている。



図 4：栗原市教員プラットフォーム

#### ②チャットルームによる「教員オンライン・コミュニティ」構築と活用

昨年度、若手教員の困り感を調査した結果によると、先輩教員に日々の学習指導について教えて欲しいと考えている教員が多数を占めている。また、その他の学級経営、児童理解、生徒指導等の様々な悩みを主任や先輩教員に伝えたいと思いつつも、日々の多忙感により気軽に話せないという悩みを抱えており、メンタリングの大切さが浮き彫りになっている。そこで、若手教員同士の交流の場としてのチャットルームの開設をし、中規模校 1 校、小規模校 2 校の初任層教員に参加してもらい、実践を行った。生徒指導上の問題等については、個人情報等の問題により、ルームでの発言は避けてもらい、主に学習指導及び学級経営に特化したものになっている。各ルームにはメンターとして中堅教員を 2 名程度配置し、若手教員の個々の悩みに寄り添う体勢を取っていく。詳細は「代表的な実践」に示す。

## 4. 代表的な実践

### (1) 築館小学校研究授業公開及び研修会

①テーマ：『『教える』と『委ねる』の境界線はどこ？』

#### ②授業公開

○単元名 5年社会科「私たちの生活と工業生産」

○本時の目標

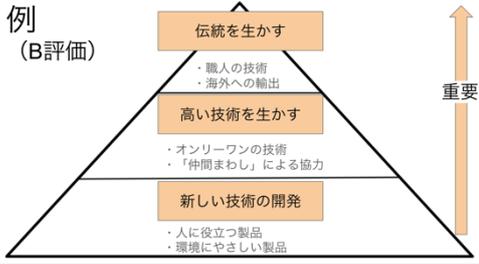
単元内自由進度学習は、同時に多種多様な学びが展開されるため、ねらいも評価も各自の学び方によって異なる。そのため、単元を通して評価するパフォーマンス課題のルーブリックを以下に記載する。

○形態 単元内自由進度学習



写真 2：5年社会科 自由進度学習

○指導過程

一般的な学習の流れと課題	学習内容（○必ず取り組む課題、☆児童が考えた課題）	
①日本の工業生産の課題 P. 40～41 ○日本の工業生産の課題について話し合い、学習問題をつくる。	○日本の工業の課題について話し合う。 ○中小工場の役割について話し合い、学習問題をつくる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">一斉指導でガイダンスと個人の計画済み</div> ※単元を貫く問い <u>「工業生産の発展のために日本が大切にすべきことは何か？」</u>	
②昔から伝わる技術を生かした工業生産 P. 42～43 ○昔から伝わる技術をどのように工業生産に生かしているのか。	○「めがね協会の小松原さんの話」をもとに、日本各地の伝統を生かした工業生産を調べ、伝統的な技術をどんな他の技術に生かしているのかを調べる。 ○「地域ブランド」とは？ ○どんな地域ブランドが日本にはあるのか？	
③高い技術を生かした工業生産 P. 44～45 ○ものづくりのまち大田区がほこる技術は、どのようなものなのか。	○「富永さんの話」「田中さんの話」などから大田区での工業生産を調べ、他地域との違いについて話し合う。 ○「仲間まわし」の良さを説明する。(B:1、A:2、S:3人) ○どうして「オンリーワン」の技術を大田区では作り上げることができたのだろうか。	
④新しい工業生産の取り組み P. 46 ○日本の工業生産では、どのような新しい取り組みが行われているのか。	○写真資料1から4は、日本の工業のどんな課題をクリアしたり、発展させたりするものだろうか。 ○日本の工業生産はすぐれた技術をどのように生かし、発展していこうとしているのかをPadletにまとめる。	
⑤これからの工業生産の発展に向けて P. 48～49 ○これからの日本の工業生産の発展のために、大切だと思ふことを話し合い、ランキングにまとめる。	○工業生産の発展のために日本が大切にしていべきことをランキング（1位から3位）にして表現する。	例 (B評価) 

○ルーブリック

	S 評価	A 評価	B 評価
思考	労働人口、地球環境、資源の確保、伝統を守る、など日本の工業の課題を地域社会や国際的な視点（例：SDGs など）からとらえ、それぞれの理由をわかりやすく考える。	労働人口、地球環境、資源の確保、伝統を守る、など日本の工業の課題について考え、その中から大切だと思う4つを選び、それぞれの理由をわかりやすく考える。	労働人口、地球環境、資源の確保、伝統を守る、など日本の工業の課題について考え、その中から大切だと思う3つを選び、それぞれの理由をわかりやすく考える。

表 現	工業の課題の解決について考え、学習したことをもとに、日本の工業生産を発展させるために大切なことを3つにしぼり、消費者や生産者の立場などから考えてランキングで、より説得力のある表現をしている。	工業の課題の解決について考え、学習したことをもとに、日本の工業生産を発展させるために大切なことを3つにしぼり、消費者や生産者の立場から考えてランキングで表現している。	工業の課題の解決について考え、学習したことをもとに、日本の工業生産を発展させるために大切なことを3つを選び、ランキングで表現している。
--------	---	---	---

③ ワークショップ

以下の問いについて、WSを行った。

- 学校生活の中で委ねることができること（活動・ルール等）は何でしょうか？
- その委ねられることは1年の中でどの時期から割合を増やすことができそうですか？
- 逆に絶対に「委ねない・委ねてはいけない」ところはどこでしょうか？
- 授業では、どこまで教えて、どこまで委ねますか？



写真3：自由進度学習

- 第5学年算数科指導案「整数の性質を調べよう」の授業づくり

④ 鼎談

- テーマ：『教える』と『委ねる』の境界線はどこ？ 大学の研究者3名による鼎談

(2) チャットルームによる「教員オンライン・コミュニティ」構築と活用

①教員コミュニティの組織

- 実践校 A校（中規模校）  
B校（小規模校）  
C校（小規模校）
- コミュニティ 低学年ルーム  
中学年ルーム  
高学年ルーム

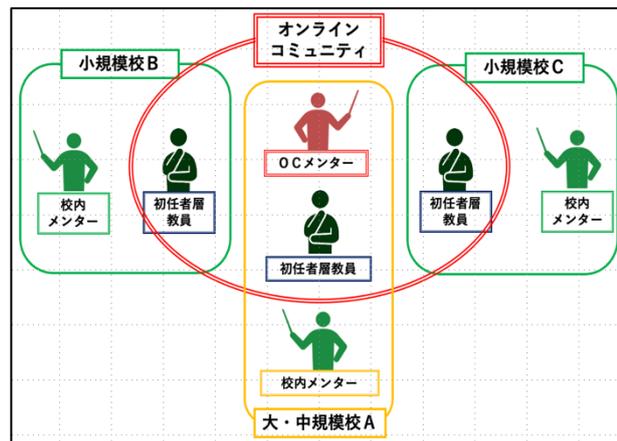


図5：教員オンラインコミュニティ図

②メンティ

- A校6名（初任2, 2年目2, 3年目2）
- B校3名（初任1, 2年目1, 3年目1）
- C校3名（初任1, 2年目1, 3年目1）

③メンター

- A～C校それぞれから、「校内メンター」1名配置
- 大・中規模校から「オンライン・コミュニティメンター」1名配置

④交流範囲

○日々の授業づくり（教科指導）

- ・初任層教員の授業力向上を目指して、各教科・領域の授業づくりについて交流を行う。日々の授業の情報交流と授業づくりについて学び合える場とする。

○日々の学級経営（学級経営）

- ・初任層教員の学級経営力向上を目指して、学級づくりについての交流を行う。各学年の発達段階に応じた学級経営のあり方や具体的な手立てについて学び合える場とする。

5. 研究の成果

**(1) 若手教員の ICT 活用指導力及び教科指導力の向上を目指すべく、日常的な取り組み及び各種研修会を充実させることができた。**

本研究により、いくつかの実践的な研修を行い、若手教員のみならず、市内教員の ICT 活用指導力の向上と、授業力の向上を図った。全国の優れた指導法やコンテンツ等がある中で、本市の教職員にとってどのような研修が必要なのかを見だし、実態に合った取り組み



写真 4：自由進度学習ワークショップ

みを行う必要があると考える。本市の実態を踏まえ、年間通して今必要とする研修を行うとともに、明日の授業を見据えた授業づくり研修を行うことで、即戦力となったと考える。実際に、研修会后、複数の教員がオンラインコミュニティを通して、互いに情報交換しながら実践している姿を見ることができたことは、大きな成果と言える。今後、教員同士が集い合い、学び合える環境と研修のリンクを総合的にコーディネートすることが求められると考える。

**(2) 若手教員が集い合い学び合える環境の必要性を確認できた。**

昨年度、各種調査により課題を明らかにすると共に研究実践の方向性を見出すことができた。それを受けて本年度は具体的な実践を積み重ねてきた。

特に、チャットルームによるオンラインコミュニティ構築と実践については、メンター及びメンティへのインタビューにより、以下のような成果が見えた。今後、年間通しての実践及び市内全域での取り組みにより、更なる効果が期待できる。

- オンラインコミュニティ内でのメンターからの情報提供や交流により、授業の質に広がり  
と深まりがみられたことや、さらに学びたいという意欲が向上していることが、本コミュニティに参加したメンティへのインタビューにより明らかになった。
- 実際に校内メンターからも、授業の質の高まりが感じられたという感想が寄せられ、本コミュニティの効果が、メンターの視点からも明らかになった。

## 6. 今後の課題・展望

(1) 「栗原StuDX チーム」により、今年度の研究成果を継続・発展させ、若手教員のICT活用指導力を向上させると共に、持続可能な取組とする。

今年度の研究により取り組んだ、①「教員研修プラットフォームの構築」、②「ロイロノートの実践事例、収集・蓄積・活用」、③「栗原版情報活用能力体系表の授業への位置づけと実践」、④「教員オンラインコミュニティによる若手教員交流の場構築」を、継続・発展させることで、若手教員の指導力向上を図る。また、昨年度の調査により課題となった、AI ドリルの授業への生かし方、個別指導への生かし方、評価への生かし方等について十分な実践を行うことができなかったため、今後実践を積み重ね、その効果を共有することで、市内教員の個別最適な学習と協働的な学びを一体的に指導する力をつけていく。

(2) リーディングDX事業参画による、更なる指導力向上を図る。

次年度、本年度中心的に実践を積み重ねてきている築館小学校区（小学校2校，中学校1校）においてリーディングDX事業に取り組む予定となっている。次年度行われる各種研修会や授業研究等を広く公開し、周知することで、さらなる進展が期待できる。

(3) GIGA2に向けてのさらなる教育DXの充実を図る

次年度、「栗原市情報教育推進計画」を作成するに当たって、本研究の取り組みをさらに充実・発展させることで、若手教員の指導力の向上を図る。

## 7. おわりに

2年にわたり本助成を受けることができたことで、本市の現状と課題を把握すると共に、各種実践を積み重ねると共に、今後の方針を確立することができたことに感謝の気持ちでいっぱいである。今後、この取組を一過性のものにせず、持続可能な取組となるよう、本委員会の取組から、市全体の取組に発展できるよう進めていきたい。そしてそのことが、市内教員のICT活用指導力の向上とともに、児童生徒の情報活用能力及び学力の向上に繋がることを期待している。

## 8. 参考文献

- 情報活用能力育成のためのアイデア集 文部科学省 令和5年
- StuDX Style 文部科学省 Web ページ
- 未来の教室を創ろう LEARNING INNOVATION 経済産業省 WEB ページ
- 学校DX戦略アドバイザー事業 ポータルサイト 文部科学省 WEB ページ
- 大脇康弘著 『若手教師を育てるマネジメント～新たなライフコースを創る指導と支援～』ぎょうせい2019年
- 大石智著 『教員のメンタルヘルス』大修館書店 2021年
- 島田希『ミドルリーダーのためのメンタリング・ハンドブッカー若手教師支援の充実を目指してー』 公益財団法人 パナソニック教育財団 2012年
- 横浜市教育委員会編著 『「教師力」向上の鍵ー「メンターチーム」が教師を育てる、学校を変える！』 時事通信社出版局東京 2011年